
another days

R A N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

another days

【Nコード】

N6625U

【作者名】

RAN

【あらすじ】

『天空物語』のカデシユ×ドリス。

カデシユとドリスが、ステルス国が滅びないで、平和な世界で出会ったら、というパラレル世界を描きます。

< 1 > (前書き)

【はじめに】

幸宮チノさんの『天空物語』の二次創作です。

もしステルス国が滅びないで、カデシユとドリスが婚約者同士として出会っていたらどうなるか、ということを書いてみました。

琥珀さんとの共同作です。連載がとまってしまったので、私の片方分だけ載せていきます。

今日は「婚約者」の所に行くらしい。

正直、「婚約者」というものが何かをいくら聞かされても、さっぱりわからない。

だいたい、なぜ自分に「婚約者」が必要なのかわからない。友達と何が違うのだろうか。

父上に聞いてみても、時間がたてばわかることだとおっしゃっていた。

そう考えているうちに、「婚約者」がいるという国に着いてしまった。

ここまで来たからには、父上の言葉を信じるしかない。

「婚約者」がいるのは、グランバニアという遠方の大国だ。

まず印象的なのが、深い森に囲まれた大きな城。

中に入れば、ストロスよりも活気溢れる町並み。

何もかもが目新しく、歩いているだけで楽しかった。

この国に住んでいる「婚約者」はどんな人なのだろうか。

ずいぶん待たされている。

なんだか外が騒がしい。

とても嫌な予感がする……。

父上も不安を隠しきれないようだ。

部屋に付いてくれているメイドの人も、笑顔で対応してくれているが、どこことなくぎこちない気がする。

しばらくすると、外が静かになった。

それから少したった後、部屋のドアがノックされた。

部屋には、鬚を豊かにたくわえながらも、どことなく頼りなげな男性と、その男性に連れられて、くせつ毛で黒髪の少女が入ってきた。

男性はひきつりながらも笑顔なのに、少女は目線を下にして、仏頂面だ。

「お待たせして申し訳ないです。私が現国王のオジロンです。そして、これが私の娘のドリスです。少々お転婆なものでして……」

オジロンさんは父上に向かってそう紹介した。

言葉を濁した部分は、聞かなくてもなんとなくわかる。

これはもしかしなくても……

「時間を割いていただき感謝いたします。これが私の息子のカデシユです。カデシユ、ドリスさんがお前の『婚約者』だ。挨拶しなさい」

父上のその台詞が衝撃的すぎて、一瞬頭が白くなった。

父上達が色々話しているうちに、僕はドリスという少女と二人きりにさせられてしまった。

お互いに黙ってしまって、重い沈黙が部屋に流れた。

初対面の相手に、何を話しているのかわからない。

それに、先程の様子から察するに、彼女はかなり乱暴な性格なのではないか。

……下手なことは言えない。

すると、彼女の方から話しかけてきた。

「ねえ……あんたは婚約者とか言われて、どう思ってるの？」
「……………」

「どうだと言われても、よくわかっていないものをどう思うこともできない。」

「だが、何か答えないとこの重い雰囲気はなくすことはできなさそうなので、素直にそのまま答えることにした。」

「なにより、答えないと彼女に何をされるか……。」

「僕は『婚約者』ってものがどういうものかわからないから、なんとも言えないよ。父上もそれでいいって言ってたし。……そういう君はどう思ってるの？」

「……………あたしも友達と何が違うか実はよくわかんないんだよね。でも、あんたの話聞いて、あんまり今は気にしなくてもいいみたいだよかった」

「そう言つと、彼女が動く心配がし、僕の前に影が落ちた。」

「目の前に立った彼女は笑顔で手を差し出していた。」

「それなら、せっかくこうして会ったんだから、仲良くしよう！
よろしくね、カデシユ！」

「眩しい 太陽みたいな笑顔だと思った。」

「怖い人かと思っただけど、とても可愛い女の子だった。」

「きつとアレも、彼女なりに色々悩んでいたんだろうと思う。」

「僕は、胸が温かくなる不思議な感覚を覚え、彼女の手を握り返した。」

「うん、これからよろしく、ドリス」

「僕も同じように笑っているだろうか。」

「この嬉しい気持ちは、彼女に伝わっているだろうか。」

「せっかく来たんだから、城を案内するよ！」

彼女はその笑顔のまま、僕の手を引つ張って外へ向かう。

この手から、気持ち彼女に伝わればいいなと思ひ、僕は彼女の
手を少し強く握った。

ドリスの国から帰ってきて、父様に「手紙でも書いたらどうだ」と言われ、手紙を書いてみた。

離れている国だから、そうそうお互いに会えない。だから手紙を書くのだ。

とりあえず、「お元気ですか」と書いてみる。

あとは当たり障りなく、自分の近況を書いてみようか……。

………つまらない。

あまりにも内容が無難すぎて、自分でもつまらない手紙だと思っ
てしまった。

自分でもそう思うのに、ドリスが読んでくれるとは思えない。
しかも彼女はこういうものは苦手そうだし。

………もう少し考えてみよう。

そうして月日は過ぎていった。

手紙も、最初だけ返事が返ってきたが、あとは音沙汰がない。
彼女の性格からすれば予想できたことではあった。

だから、関係が希薄になるのは必然的だったと言えるだろう。
そんなある日、彼女からいきなり手紙が来た。

『近日、そちらに伺わせていただきます。ドリス』
手紙にはそれだけが記してあった。

近日っていつだ。

距離が近いわけではないから、正確な日時を記すことはできないのかもしれないが、これでは突撃訪問されたのと大して変わらない。だいたい、彼女は何の用があつて来るのか。今まで何も音沙汰がなかったのに。

わずらわしい。

不快でもあるが、心地よくもあるこの感覚が何なのかわからなかった。

どうして彼女は、こうも私を悩ませるのか。

外がうるさくなってきた。

来たのか……。今更何をしようというのか。手紙もよこさなかつたくせに。

すると、部屋の扉を叩く音が聞こえた。

誰かが呼びに来たのだろーと思ひ、開けるよう促した。

「カデシユ！ 元気だった？！ 遊びに来たよ！」

入ってきたのは予想外にも本人だった……。

私は驚きのあまり、しばし固まってしまった。

ドリスはそんな私の反応を見て、明らかに戸惑いの色をその顔に浮かべた。

「えと……その……ずっと手紙出さなかったのと、いきなりで……めんね……私……」

「なぜ来たんだ」

今頃。

その言葉を私は飲み込んだ。

その言葉を言うと、自分が惨めになりそうな気がしたからだ。

なぜかはわからない。無意識だった。

言いたいことはたくさんあったが、私はそれを視線にこめて彼女を見た。

そして、私はなぜかイラついてもいた。

それは怒りなのか、もしくは別の何かなのか……。

わからないことだらけだった。

イラつきの原因はこれのせいでもあるかもしれない。

私の言葉に、ドリスはさらに動揺の色を深めた。少し目線が下になった。

いい気味だ。

私を悩ました分、お前も悩めばいい。

しばらくこの沈黙がまた続くかと思っただが、またも予想は裏切られた。

「……バツカヤロー!!!」

その言葉と同時に、拳が目の前に飛んできた。

体力にあまり自信のない私は、見事に吹っ飛ばされてしまった。

腕に自信はないが、さすがに女性に倒されたのは衝撃的だった。

そしてドリスは、殴った反動で踵を返し、部屋から出ていった。

だんだん殴られた衝撃がおさまってきた私は、ただただ悔しい思いが胸を占めていた。

別に殴られたことが悔しいのではなくて……。

なんなんだ。

私はなぜ悔しいんだ？ この気持ちは何なんだ。

私はしばらく、その場から動けずにいた。

今までに感じたことのない気持ちに整理をつけたかったからだ。だが、黙っていても、その感情は少しもおさまらなかつた。むしろ、気にすれば気にするほど、どんどん膨れ上がった。そして、私は一つ気づいた。

原因がわかっているのだから、それをどうにかすればいい。

とりあえず、私は部屋から出ることにした。

と、気づくと、部屋の入り口に見知らぬ少年が立っていた。金髪のボサボサ頭に、青いマントを身に着けていた。

その少年は人懐こい笑みを浮かべていたが、そのまとう雰囲気は隙がなかった。

どこか、高貴な印象があった。

「お前は、何者だ」

私は、自分よりも年下の者に気迫に圧された、などと悟られなくなかったから、わざときつく言った。

しかし少年は変わらず笑顔で、私に小走りで近づいてきた。

そして、背伸びをして顔を近づけ、しーっと口の前に人差し指を立てる。

「ぼく、実は内緒でついてきちゃったんだ。だから、ぼくのこと誰

にも言わないで」

「は？」

私は思わず声をあげてしまった。

少年は慌てて、私の口をふさいだ。

「ほ、ホント！　お願い！　ぼくはドリスの従兄弟の子供……だから……まあ、とりあえずそんなところ。名前はテン。よろしく」

「……………」

いきなり様々なことを言われ、私は戸惑ったが、とりあえず少年テンに従うことにした。

ドリスの親戚だと言っし、彼も使えるのではないかと思ったからだ。

私が黙ったのを悟ると、テンはゆっくりと手を離した。

「ありがとう。ぼくね、ドリスがいきなり婚約者に会うとか言っ出て行っちゃって、気になって妹のソラと一緒にについてきちゃったの。だけど、城の中でソラと離れちゃって探してるんだ。カデシユもドリスを探しに行くんでしょ？　一緒に探してくれないかな？」

テンは恐る恐る、といった感じで、私を見上げた。

私ははテンを見下ろして、考えるフリをするため、しばし黙る。

すぐに返事をするのは、何となく癪だったからだ。

そして、一息を吐いた。自分で言い出すタイミングを作った。

「……………わかった。私もあまり面倒なことになるのは避けたい。ここは協力しよう」

私の答えを聞くと、途端にテンは笑顔になった。

まさに少年らしい、一気に花が開くような笑顔だった。

「ありがとう！　カデシユ！　よし、そうと決まればしゅっぱーっ！

」！

「お、おい……」

テンは私の手を、その小さな体のどこにあるのか、強い力で引っ張った。

私は前につんのめりそうになりながら、テンについていった。

というか、こいつは存在がバレてはまずくはなかったのだろうか

……？

グランバニアの人間は、こういうタイプの人間ばかりなのだろうか。

流されるままにこのテンと名乗る少年と共に城の中を歩いているが、どうしたものだろうか。

とりあえず、内緒できたとは言っていたが、グランバニアからの客人には違いがないから、放っておくわけにもいかなかった。

どうもそれだけじゃない気もするのだが、説明がつかないのでそういうことにする。

「ぼく他の国に来るの、ラインハット以外初めてなんだ」

「そうか」

ラインハットは最近、いなくなった王の兄が戻ってきて、盛え始めている。

北方にあつて、そこまで大きい国ではないが、ストロスに比べれば人口の多い国だ。

だが、確かグランバニア王と旧知の仲だから国交があると聞いた。「だからぼくの国と違うものとかいっぱいあつて楽しいよ」

グランバニアといえば、世界的にも有名な大国だ。

今は王が変わつたらしいが、前王パパスは賢王と言われるほど、政策も充実し、また民にも慕われていた。

だが、どういうわけか、王妃が行方不明になったという話の後に、パパス王も行方知れずとなった。

今の王に定まるまで、国王のいない不安定な状態の中でも国がもつたのは、やはり賢く忠実なる臣下達と民のおかげだろう。

その世界にも名高き国から来た。

話を流してしまったが、今このストロスには、ドリスとの血縁だというから、王族が三人もいるということになる。

私は、今更になって動揺してきた。

本当に、面倒なことが起こる前に彼が探している人物を急いで探

さねばならないようだ。

そう考えると、急に私はやる気が出てきた。

「探している者はどういう特徴がある？」

相手が意外な大物だと認識はしたが、口調は改めるつもりはなかった。

「うんとね、ソラって名前で、女の子で、ぼくと同じ金髪で目も同じ色してて、髪は肩より少し上」

「そうか」

金髪碧眼という特徴なら、案外目立ちそうだが、今のところその条件に該当する人物は見えない。

「その人が行きそうな所など、心当たりはあるか？」

「うーん、何だろうなあ……あ！」

と、テンが何かに目を止めて走りだした。

私は探している相手を見つけたのかと、慌ててついていく。

「すっごいきれいだね！」

だが、テンが来たのは中庭だった。

確かに、ここにはストロスの地方にしか咲かない植物もあるから珍しいかもしれない、が……。

「お前は探す気があるのか？」

私は、奇立ちを隠さずに言った。

「だって見たことないきれいな花が咲いてたんだもん！　もしかしたら、ソラもこの花にひかれて来るかもしれないし！」

私は呆れて言葉もなかった。

どこからそんな考えが浮かんでくるのか。

だが、何となく憎めないのがこの少年の不思議なところかと思っ

「あ！ ソラ！……ドリス?!」
そこで、テンがまた声をあげた。
今度こそ探していた相手かと思い、見ようとしたが、テンが言ったもう一つの名前に体が固まった。
私の目線の先には、同じように目を見開いてこちらを見ているドリスがいた。

「ソラ！」

「テン！」

「……………」

双子が喜んで、互いに走り寄っていたが、私はそこから動けず
いた。

向こうも同様に、ただこちらを気まずそうに横目に見ていた。
その様子に、やがて双子達も気づき、カデシュとドリスを見やる。
「もしかしてドリスの婚約者ってカデシュ?!」
テンが嬉しそうに声を上げた。

「……………」
「……………」

だが、私は相変わらず何も言えずにいた。
いたたまれず、目をそらしてしまった。

「……………今日は、部屋を用意させるから、そこに泊まるといい」
私は、その場から去りたくて、そう言っていた。
そして、彼らに背を向けて中庭を出ようとした　　が。

「ボクはカデシュの部屋で寝たい！」

テンがそう言う声が聞こえた次には、私の腕に何か触れる気配があり、見るとテンが腕をつかんでいた。

先程は茂みをはさんだ向こうにいたのに、何とも素早いことだ。

「なぜだ」

私はできれば、今は誰ともいたくはなかった。

「ドリスとソラは女の子同士だからいいけど、僕は同じ部屋で寝れないよ」

「なら、部屋を用意する」

「せっかくみんなできたのに、一人は嫌だ。だいたい部屋がもつたいない」

「もつたいないって……」

およそ王族とは思えない言葉を、テンの口から聞き、私は脱力して、思わずため息をついてしまった。

「いいじゃーん！減るもんじゃないしー！ボクもつとカデシユとお話したいんだよ！」

だんだんテンが駄々をこねる口調になってきた。

私は困ってしまい、思わずドリス達の方を見てしまった。

まず、ドリスと目が合い、互いに気まずく、慌てて目をそらした。そして、私はテンの妹のソラという少女に視線を移した。

ソラは困ったような笑みを浮かべていた。

「お兄ちゃん、言いだしたらきかないんです。よければ、お願いできませんか？」

何となく、少女の頼みを断るのは、自分が非情な人間なように思えてくるから困る。

「……わかった」

自然とため息が出ていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6625u/>

another days

2011年9月3日06時42分発行